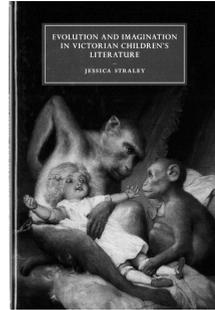


書評

Jessica Straley, *Evolution and Imagination in Victorian Children's Literature*
(Cambridge: Cambridge University Press, 2016)

川端 有子



ダーウィン、ラマルク、スペンサーなどの科学者が説いた進化論がヴィクトリア朝の文学に与えた衝撃については、つとに多くが語られている。ジリアン・ピアの『ダーウィンの衝撃——文学における進化論』はその中のもっとも知られている一冊であろう。ヴィクトリア朝のコンテキストにおいて、ジョージ・エリオットらの作品と、ダーウィニズムという当時最先端の科学の間に、このようにして実に複雑な関わり合いが示せるのなら、「児童」文学と科学の間には、どんな関わり合いを見出せるのか、そしてそれは普通の文学とは何か違った関わり合いであるのか。もし違っているとすれば、それは当時における「児童」文学のありかたを端的に物語りうるものになるのではないだろうか。そしてそれはとりもなおさず、ヴィクトリア朝英国の「児童」観の問題でもあるのではないか。

ジェシカ・ストレイリーの『ヴィクトリア朝児童文学における進化論と想像力』は、今までほとんど体系だって研究されることがなかった「児童」文学と進化論の関係を、主に5人の著名なヴィクトリア朝児童文学を具体例として論じた書物である。確かに、今までにも児童文学に進化論が与えた影響については、指摘がなかったわけではない。本書にも取り上げられているチャールズ・キングズリーの『水の子たち』、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』については、様々な研究者が進化論との関わりについて述べている。しかし、それは多くの場合、断片的な指摘であり、一瞬はっとさせる洞察でありながらも、児童文学作品を進化論と共に論じる必然性や意味を明らかにする一貫した論考ではなかった。ストレイリーが論じるのは、時系列的に、マーガレット・ギャッティ、チャールズ・キングズリー、

ルイス・キャロル、ラディヤード・キプリング、フランシス・ホジソン・バーネットの作品である。これらヴィクトリア朝の児童文学の黄金期を創出した作家たちが、進化論を否定しつつ取り入れ、あるいは信奉しつつ変形させ、その作品内で、子どもの成長と教育にとっての文学と科学の役割を、いかに位置づけてきたかが示される。

進化論においても、ストレイリーが最も重点的に取り上げて考察するのはダーウィンだけではない。中心になっているのは「個体発生は系統発生を反復する」という、いわゆる反復説である。子ども時代が、十分に成長した人間へ至る道の途中段階であり、いまだ前人間的な、原始的状態、あるいはもっとも下等な動物に近い状態であるとするのが、この立場である。

ヴィクトリア朝の子どもといえば、我々がすぐに念頭に思い浮かべるのは、美しくはかないロマンティックな天使のような子ども像であるかもしれない。その前の時代には、福音主義のキリスト教徒が唱えた、原罪を背負った罪深い子ども像という、正反対の子ども観が広まっており、ロマン主義思潮の台頭とともに、おとなに救われねばならない子どもが、逆におとなを救う天使へと転換した——おおざっぱに言えばこんな理解と説明で、ヴィクトリア朝の子ども観と児童文学について説明をしてきた。しかしながら、この時代の多くの児童文学や、また様々なその他の言説を見てゆくと、確かに子ども観の変遷はそれほど単純で簡単なものではない。子どもには正しい宗教教育を早期に施さねばならぬという福音主義的教条は廃れたとはいうものの、進化論の打撃を受けた時代の子どもの教育観は、子どもという、いわゆる未開人を、文明人としてのおとなに進化させねばならない、とその方法を探ったのである。そして、もっとも適していると考えられた教育方法は、文学教育の軽視と、実践的な科学知識教育の偏重に基づいていた。

児童文学の特質の一つは、それが子どもを対象に書かれたものである以上、多かれ少なかれ、広い意味での読者への教育効果(昔は教訓と言った)を意図するところにあるといってもいいだろう。しかしこれが文学である以上、実践的科学教育重視の進化論的教育観とは相いれないスタンスをとることもありうる。こうして科学と文学は、つまり進化論と想像力は、ここに論じられた児童文学の中で、拮抗し、衝突し、影響を与え合ってきた

のである。

最初に取り上げられるマーガレット・ギャッティは、自然神学をその思想の根幹に置いており、進化論には当然、反対の立場をとっていた。しかし、彼女が子どもの読者に向かって書いた動物や植物についての物語集『自然の寓話』(*Parables from Nature*, 1855-71)の中では、自然には人知の及ばぬところあり、と自身の自然神学理論に限界を設け、修正せざるを得なかった。この作品の中で、ギャッティは、自然そのものではなく、自然を解き明かし、再定義する文学をこそ、学ばねばならないと説き、ダーウィン後の時代の読者達に向かって、自然神学のレトリックを更新している、とストレイラーは論じる。

一方、チャールズ・キングズリーは明らかに進化論信奉者であり、作品『水の子どもたち』(*Water-Babies*, 1863)においては、煙突掃除の少年トムが、水の中の生物から新たな人間へと進化を遂げる過程を描いている。労働者階級の貧困と怠惰を代表するような少年は、スペンサー説くところの墮落した人間の姿に他ならない。ところが、トム少年が人間として成長を遂げ、道徳的向上を達成するのに必要なのは、科学でも実践でもなく、想像力とそれをはぐくむ文学であることが示されているのだ。つまり、キングズリーは、人間の進化を描くのに、科学ではなく、ファンタジーやおとぎ話といった文学的手法を用いたのである。

キャロルは進化論に対し不信感を抱いていたが、『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865)の中で、彼はパロディとナンセンスという手法によって(これをストレイラーは文学の「進化」形と呼ぶ)、科学の代替となるような領域を示し、科学を笑いのめすことのできる人間の言語の可能性を、非常に創造的で柔軟性に富むものととらえた。言葉の持つ遊びという機能こそ、何よりも人間的なものなのである。

キプリングの『ジャングルブック』(*The Jungle Book*, 1894)は、基本的に文明化の行き過ぎた帝国の退化を面前にした時代に、ジャングルにおいてケモノの定めを学んで育った少年モウグリを主人公として、もう一度、進化の過程をやり直そうというロマンスであるように見える。しかし、キプリングは、モウグリを永遠に遊び続ける少年として描くことで、いわゆるビルドゥングスロマンの定型を否定した。このストレイラーの読解は、今ま

で議論的であったモウグリの子供の問題を、新たに位置づけなおすことに成功している。このようにして、これらの作家たちは、子どもの教育における文学の優位性をその作品中で実現し、実践的科学教育の手法を修正して示してきたということになる。

ストレイラーが最後に挙げるのは、バーネットの『秘密の花園』(*The Secret Garden*, 1911)であり、これは本書の中でも最も興味深い章である。というのは、ここで初めて、進化論が女性という性と共に論じられるからである。進化と女性、とりわけ母性という問題が出会った途端、あるいはそれは当然のことなのかもしれないが、進化論は突然、優生学の方向に向かい始めるからである。ダーウィンのいとこであるフランシス・ゴルトンをはじめ、優生学を奉じる進化論者たちは、人間の進化において母性と、女性のパートナー・チョイスがどれほど重要かを説いた。このコンテキストにおいて、『秘密の花園』を読むと、バーネットのヒロインのメアリの女性としての成長は、まさに優生学的な観点から論じられるのである。彼女は、インドで生まれたという<異常な>子ども時代を修正し、イギリスの自然に親しみ、一体となって庭造りをすることで、女性としての成熟を成し遂げてゆく。彼女がパートナーとして選ぶのは、労働者階級のディッキンではなく、正しい領主の血を引くコリンでなければならない。

今まで『秘密の花園』の研究において論じられてきた種々の問題、例えば帝国、階級、ジェンダーのアジェンダが、進化論というキーワードによって切りなおされる時、この作品が、世紀転換期の文化にどう位置づけられているかを再確認することができる。

本書は、進化論が児童文学に与えた影響だけではなく、その二つの相互作用をも明らかにした。そのことにより、「児童」文学の、教育的側面と文学的側面の葛藤をも示すことになったといえるだろう。この研究を基に、さらに多岐にわたる作品へのアプローチの糸口が与えられることと思われる。また、ここで議論されている実践的科学の、文学に対する優位性への疑義は、文学教育についての、きわめて今日的な課題にも示唆を与えるものではないだろうか。